



日本語教育の世界へようこそ。

将来の仕事として日本語教育を選ぶにせよ、選ばないにせよ、皆さんは日本語教育に何か興味を持ったからこそ、この教科書を開いているのだと思います。

この本には、

- 具体的な日本語の教え方
- 教える上で大切な日本語の知識

が、150語の専門用語とともに、他のどんな本よりもわかりやすく書いてあります。それらをよりよく理解するため、大学での授業やコースが始まる前に、以下の点をざっと読んで理解しておくと、授業がぐっとわかりやすくなります。

まず、皆さんが高校までやってきた「国語教育」と、外国人に日本語を教える「日本語教育」は、さまざまな面で違うことを知っておきましょう。

国語教育のいちばんはじめといえば、小学校1年生の4月の授業でしょう。この授業の前、1年生の1人に、

「名前は何ですか？」

と聞いたら、その子はたとえば

「すずきしょうたです！」などと、元気よく自分の名前を言うはずです。

ところが、日本語教育の最初の授業で、そこに来ている外国人の1人に対して、同じように

「名前は何ですか？」

と聞いても、相手は日本語が何ひとつわかりませんから、答えることができません。

小さいときに自然に覚えた最初のことばを「母語」と言います。

小学1年生の鈴木翔太くんは日本語が母語なので、7歳くらいになれば、生活の上で日本語を使うことにさほど不自由はありません。けれども日本語が母語ではない外国人の場合、学習のスタート時点では、日本人の小学1年生と比べても日本語の聞き取りや会話は難しく感じるのが普通です。

▶ポイント1 国語教育と日本語教育ではそれを学ぶ人の「母語」が違う

小学校の国語の時間に戻しましょう。

教室にいるのは誰でしょうか。先生と、あと 30 人くらいの生徒たちでしょう。この場合、ほとんどの生徒はみな同じ年齢の日本人の子どもです。最近は両親または片方の親が外国人である、いわゆる「外国につながる子ども」も増えていますが、基本的にこの「同じ年齢」「同じ国籍」という成り立ちは、義務教育の 9 年間で、変わることはありません。

ところが日本語教育の場合、学ぶ人たちの国籍や年齢はかなり違います。

どこかの日本語学校の教室をのぞいてみましょう。席についている人の国籍は、中国、ネパール、ベトナム、ロシアなど、実にさまざまです。国籍がバラバラというだけでなく、高校生くらいの女子がいるかと思うと、40 歳くらいの男性ビジネスマンが座っていたりもします。

このように日本語を学ぶ人が必ずしも学校教育を受ける子どもとは限らないため、日本語教育では日本語を学ぶ人のことを「生徒」とは言わずに、「学習者」と呼んでいます。

この学習者はまた、日本語を学ぶ目的もそれぞれ違います。

- 日本の大学に進学したい
- 日本の会社で働くことになった
- 日本人と結婚したので生活の上で日本語が必要だ
- アニメが好きで、とうとう日本へ来てしまった

など、いろいろな背景の外国人がいろいろな目的で日本語を学んでいます。

▶ポイント 2 日本語教育は学習者の国籍、年齢、学習の目的がさまざま

今度は生徒や学習者ではなく、教えている先生のことを考えてみましょう。

日本の小学校・中学校で国語を教える先生は、まず間違いなく日本人です。学校によっては英語を教える外国人の先生がいる場合もありますが、こういう先生は週に 1～2 回来るだけの、いわばゲストです。アメリカ人の英語の先生が、3 年 2 組のクラス担任をしたりすることはありません。

ところが日本語教育の場合、日本人ではない外国人の先生がたくさんいます。

特に海外では、オーストラリアならオーストラリア人、インドネシアであればインドネシア人の先生が日本語を教えるのは、まったく普通のことです。

これは日本の小学校・中学校で英語を教える日本人の先生がたくさんいるのと同じで、いわば当たり前のことです。それでも外国人なのに日本語を教えている先生が何万人もいるという事実は、ちょっと驚きかもしれません。こういう人たちは日本語が母語ではない、つまり日本語のネ

イティブ・スピーカーではないので、「非ネイティブ日本語教師」と呼ばれます。

▶ポイント3 日本語教師の中には非ネイティブの外国人教師がたくさんいる

授業を比べても、国語教育と日本語教育ではずいぶん違います。

小学校・中学校で受けた国語の授業はどういうものだったか、思い出してください。他の科目と同じように、毎回の授業は「教科書の～ページまで進む」ことが目標だったと思います。そして教科書のある部分を生徒が読み、先生はもう一度それを読みながら「筆者の言いたいこと」の解説をしたり、黒板に書いたりしたでしょう。そして生徒はその説明を聞いたり、板書を写したでしょう。

つまり、どちらかといえば、国語教育では教科書に書かれていることを読んだり、漢字や作文を書いたりすることが主な内容だったはずです。スピーチをしたり、大事な文を先生のあとについて発音したりするような練習は、国語教育ではなかったはずです。

しかし日本語教育の場合、教科書の内容を学習者が教室でそのまま読み上げるようなことはありません。授業の最初から最後まで、教室では先生が話しているか、それ以上に学習者がしゃべっているかです。つまり授業中、教室の中は日本語の音でいっぱいです。

はじめて日本語教育の現場を見た日本人の中には、教室がうるさい、と感想を言う人がいるほどです。実はうるさいのではありません。日本語教育では文章や文字を読み書きしたりするより、習った日本語を聞いたり、話したりする活動がずっと多いというだけの話です。

ことばを換えて言えば、日本語教育の授業では、先生は「教科書を教える」のではなく、教科書に基づいて話したり聞いたりする授業を組み立てること、いわば「教科書で教える」をやっていることになります。ということは、日本語教育の授業は、小中学校の授業でいえば、国語よりも英語、特に英語を実際に聞いたり、話したりする会話の授業に近いのです。これは特に、初級の授業で多く見られることです。

▶ポイント4 初級の日本語教育は「読む・書く」よりも主に「話す・聞く」が中心

授業について、もう少し比べてみましょう。

国語の授業では物語を読んだり、詩を読んだり、もう少し学年がいくと説明文を読んだりしたことと思います。学年が上がれば内容が難しくなるのは当然ですが、1冊の教科書の中には、わかりやすいものもあれば、難しいものもあります。

一方、日本語教育の授業では、この「易しい→難しい」の順番が非常に意識されています。たとえば、初級で学ぶ大切な内容の1つに「あげる・もらう」など、物のやりとりについての表現があります。

学習者ががんばってこれができるようになると、次は少し難しくなって「教えてあげる・運んでもらう」などを学びます。

そのあとで、今度は「あげる」が敬語になった「差しあげる」を習い、「教えて差しあげる」のような、日本人でもそんなには使わない難しい言い方を学びます。このように「易しい→難しい」の順番が明らかになっている点も、日本語教育の大きな特徴と言えます。

▶ポイント5 日本語教育は「易しい→難しい」という学習の順番がはっきりしている

そろそろ国語教育と比べるとはやめにして、世界の日本語教育がどうなっているか、広いところから見ていきましょう。

世界中のさまざまなところで、日本語教育は行われています。

日本語学校はもちろんのこと、中学校や高校など、学校教育で日本語を教えているところもあります。また、日本企業が現地採用の社員に対して研修として日本語を教えているケースもあります。

2018年の政府の統計では、世界の日本語学習者数は、だいたい385万人くらいと言われています。でもこの数には、ラジオやテレビ、またはインターネットやスマホの学習アプリなどで勉強している人は入っていません。それらを含めると、少なくともその倍くらいの人が日本語を学んでいると言われています。この傾向は特に日本から近い国や地域で目立っており、別の調査では台湾人が3人集まると、80パーセントの確率で、その中の誰かが日本語が理解できるそうです。

▶ポイント6 世界の日本語学習者は385万人、独学を入れるとそれよりはるかに多い

上に挙げた385万人の学習者を地域別にみると、最も多いのはアジアの人たちで、ほぼ80パーセントを占めています。日本という国がどこにあり、どんな国と今までいろいろなやりとりをしてきたかを考えれば、日本語を勉強しようとする人が、日本の周辺の国や地域にいることは自然ですね。

次に国別にみると、学習者のトップ5は1位が中国（約100万5千人）、2位がインドネシア（約74万9千人）、3位が韓国（約53万1千人）、4位がオーストラリア（約40万5千人）、5位がタイ（約18万5千人）となります。（本書に掲載しているデータは2021年時点の最新のものです。）

この中では、インドネシアとオーストラリアが意外に思えるかもしれません。

インドネシアは国の方針として日本語教育を推進しており、インドネシア人の日本語教師が5,800人もいます。またオーストラリアは中学や高校の選択科目として日本語を設置しているところが多く、100人のうちだいたい1.5人が日本語を理解するほどで、この割合は世界一です。

なお6位以下はベトナム、台湾、アメリカ、フィリピン、マレーシアと続き、特にベトナムの学習者が多くなっています。

▶ポイント7 日本語学習者はアジアが圧倒的に多く、ベスト3は中国、インドネシア、韓国

さて、テレビのバラエティ番組などでも、日本語を上手に話す外国人が増えていますが、この人たちの日本語レベルはどのように分類されるのでしょうか。皆さんが英語の勉強をしたら、自分の英語レベルは、英検準2級とかTOEIC400点といったもので測定・評価されていると思います。

外国人の日本語にも、似たようなものがあります。最も一般的なのは「日本語能力試験」と呼ばれるテストで、いちばん上がN1（難しい）、一番下がN5（易しい）まで5段階あります。

それぞれの試験で、学習した時間、知っている単語と漢字の数でだいたいの目安があります。

たとえば初級の日本語を修了したレベルは「N4」ですが、このレベルだと300時間勉強し、単語を1,500語、漢字を300字知っているくらいです。いちばん上のN1だと、合格するためには900時間の勉強、10,000語の単語、2,000字の漢字が必要ですから、数年にわたる集中した勉強が必要となります。実際にここまで行く人は少なく（日本人でも英検1級取得者とか、TOEICで900点を取った人はそんなにいないのと同じです）、ほとんどの学習者はN5、N4の初級レベルの日本語ができる程度です。

▶ポイント8 外国人の日本語レベルをはかる方法として「日本語能力試験」がある

最後の2つのポイントとして、皆さんが目指すべき日本語教育というキャリアについて考えてみましょう。

日本語教師になるためには、

- ①日本語についての知識
- ②それを教える技術

の2点が必要です。

①の基礎はこの本を勉強すればよいのですが、②の技術のほうは実地で覚えるしかありません。

言い換えれば、いくら本を読んでも、授業が上手な日本語教師にはなれません。ですからいちばんいいのは、どんどん教える経験を積むことです。

はじめは地域や自治体でやっている日本語ボランティアの手伝いから入ってみるのもいいでしょう。最初のうちは失敗も多いかわりに、上達も早いものです。その中で、自分が日本語教育に向いているかどうかを少しずつ見きわめてください。

本気でやってみようと思ったら、日本語を教える能力があるかどうかを判断する「日本語教育能力検定試験」を受けることを考えてはどうでしょうか。平成29年度から令和元年度までの3年間の平均合格率は27.3パーセント、しかもこの数値は年々上昇傾向にありますから、合格は決して無理ではありません。

▶ポイント9 上手な教え手になるためには知識と経験の両方が必要

日本語を教える機関の代表は、国内の日本語学校です。

2018年現在、多くの日本語学校で学習者が増えています。また日本語学校そのものの数も増えており、経験の浅い若手の教員から主任クラスの教員まで人手が足りず、多くの機関が教師を募集しています。ところがほとんどの学校は少人数の教育をしており、しかも途上国からの学習者のために学費を安くしているため、結果としてプロの日本語教師の多くは、決して経済的に恵まれた待遇を受けているとは言えません。皆さんがキャリアとして日本語教育を選ぶ上で、このことが大きな障害となることはたしかです。

もちろん、恵まれた待遇にある日本語教師も数多くいます。安定した規模の大きな学校に勤める教師や、またビジネスマン相手の1対1の授業をする教師などがその例です。

また、国内での学習者の増加にともない、どのような日本語を勉強したいかという「学習者のニーズ」もまた細分化しています。

それに備えて、ただ日本語が教えられるだけではなく、販売・会計・アパレルなどの専門科目が教えられる教員と協働してプログラムが企画・立案できる教員や、自分自身が何らかの専門を

持ち、それを日本語で教えられる人材が求められてくるでしょう。これらはいわば「日本語教育のコーディネーター」「サブキャリアとしての日本語教育」という考え方ですが、こういったキャリア作りも自分の視野に入れておくといよいでしょう。

▶ポイント 10 待遇や将来を考えると「コーディネーター」「サブキャリア」としての日本語教育という選択肢もある

それでは、ここからがいよいよ日本語教育のスタートです。

10 点のポイントをさっと読み返し、さっそくビデオで実際の日本語教育の授業を見てみましょう。

授業動画 URL

<http://www.bonjinsha.com/wp/mikata>



登場人物紹介

ロン先生 (Ron Taylor)



アメリカ・カリフォルニア出身の日本語教師。日本人と結婚したのを機に来日して、インターナショナルスクールで日本語を教えた後、大学でも英米の学生たちに日本語を教えはじめる。今回は学科を越えた1年生向けの「基礎ゼミ」で日本語教授法を担当する。授業は質問を多く投げかけ、学生を褒めて伸ばすタイプ。

ハルカ (加藤晴香)



国際教養学科。近県の私立校から試験を受けて入学した1年生。英語が好きで、高校の英語教員を志望。明るいサバサバした性格で自称「男子より女子に好かれる」。直感で行動するほうだが、ことばの感覚は鋭い。週末は、大学の隣の駅にあるカフェでアルバイトをしている。趣味はスケートボード。

カナ (秋月加奈)



日本語学科。付属高校から推薦で入った1年生。祖父母と暮らしているために、幼いころから和菓子、書道、和室など和のものが大好きで、高校時代から日本語教師を目指している。物静かな印象だが、仲がいい友人たちには意外とハッキリと自分の意見を言う。趣味は和カフェを探すこと・町歩き。

ユウキ (友田祐樹)



社会学科。大学のすぐそばにある公立校から推薦で入った1年生。特に社会学が好きというわけではなく、サッカーがやりたくて大学に入ったので、将来のことはあまり考えていない。わからないことはわからないと言える、素直で明るい性格。月・水・金曜日は自宅の近くの回転寿司店でアルバイト中。

目次



はじめに ロン先生からのメッセージ iii

第1章 日本語の教え方の基本 2

- 1-1 はじめに：ある単語をどう教えるか 2
- 1-2 日本語を何語で教えるのか 4
- 1-3 他の言語を使った教え方 5
- 1-4 「本物」を教えるということ 7
- 1-5 シラバスとカリキュラム 9

第2章 日本語を教える技術 14

- 2-1 教授法と教授技法 14
- 2-2 理解してもらうための技法 16
- 2-3 指名の技法 19
- 2-4 評価と褒め方の技法 22
- 2-5 訂正の技法 23

第3章 日本語の単語 28

- 3-1 語種による単語の分類 28
- 3-2 反義・類義・多義 31
- 3-3 数詞と助数詞 34
- 3-4 カテゴリーとプロトタイプ 35

第4章 日本語の音声と教え方（1） 40

- 4-1 音声の基礎知識 40
- 4-2 拍の分類 44
- 4-3 拍と音節 47

第5章 日本語の音声と教え方（2） 52

- 5-1 日本語のアクセントパターン 52
- 5-2 イントネーションとプロミネンス 56
- 5-3 フットと音節 59

目次

第6章 日本語の表記と教え方 64

- 6-1 3種類の表記とその用法 64
- 6-2 漢字のシラバスと教え方 68
- 6-3 漢字の導入教材 72

第7章 日本語の文法と教え方（1） 76

- 7-1 文型とは何か 76
- 7-2 文型を使った授業 79
- 7-3 名詞の定義と分析 81
- 7-4 動詞の定義と分類 84

第8章 日本語の文法と教え方（2） 88

- 8-1 名詞文とコピュラ 88
- 8-2 形容詞文の特徴 91
- 8-3 動詞の種類とグループ 93
- 補足 日本語の品詞 101

第9章 日本語の文法と教え方（3） 104

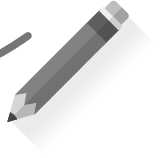
- 9-1 普通形とその活用 104
- 9-2 普通形の意味と機能 106
- 9-3 受身形・使役形・意向形 109
- 9-4 単文と複文 114

第10章 日本語の練習方法 —ドリル— 120

- 10-1 ドリルの定義と方法 120
- 10-2 ドリルの進め方と種類 125
- 10-3 ドリルにおける「本物・自分・面白い」 127

第11章 日本語の練習方法 —会話— 132

- 11-1 会話練習の位置づけ 132
- 11-2 インフォメーション・ギャップとタスクの意義 136
- 11-3 スキットやディクテーションの工夫 139



第 12 章 日本語教育の教材 144

- 12-1 日本語教育教材の分類 144
- 12-2 視聴覚教材の意義と進展 148
- 12-3 教材の基本的な使い方 151

第 13 章 技能別の教え方 156

- 13-1 聞き方の指導 156
- 13-2 話し方の指導 158
- 13-3 読み方の指導 162
- 13-4 書き方の指導 164

第 14 章 日本語教育のキャリア 168

- 14-1 日本語教育に関わる仕事 168
- 14-2 日本語教師の仕事をめぐって 172
- 14-3 日本語教師を目指すキャリアデザイン 175

おわりに ロン先生からのメッセージ 179

重要用語さくいん 186